

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

大坪 加奈子

【所属】(助成決定時)

九州大学大学院 人間環境学研究院 学術協力研究員

【研究題目】

ポル・ポト政権後のカンボジアにおける政教関係に関する研究

【研究の目的】(400字程度)

上座仏教社会における政教関係に関する先行研究では、サンガ(僧団)は為政者の支援によって清浄性を維持し、サンガが為政者の支配の正統性を保証するという相互依存的な関係性が指摘されてきた。カンボジアにおいてもサンガと為政者は相即不離の関係にあるが、このような互酬モデルとは異なるものである。つまり、ポル・ポト政権崩壊後に共産主義政権によって復興されたサンガは政治的に利用されており、サンガの多数派であるマハーニカーイ派の上層部は与党と密接な関係性を保持している。為政者によるサンガの支援は政党との結びつきを想起させるため、むしろ清浄性を損なうものであり、サンガが為政者の支配の正統性を保証するとは言いえない状況にある。

そこで、本研究はこうしたカンボジアの現実態に即してポル・ポト政権後の政教関係について考察し、伝統的な互酬モデルとは異なる様相を明らかにする。とりわけ、サンガと政府がどのような関係性を維持してきたのか、政策に対するサンガの応答を検証する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究ではポル・ポト政権後の政教関係を明らかにするため、宗教省やサンガによって作成された資料を考察の対象とし、中でも全国幹部僧侶年次会議で決定される「僧令」に着目した。その理由として、(1)カンボジアに存在する二派のサンガ(マハーニカーイ派およびトアンマユット派)がそれぞれ作成するため、二派の僧令の差異について検証できること、(2)サンガ上層部や政府の懸念事項が会議の議題となること、(3)毎年開催されるため僧令の動向や変遷を分析できること、(4)会議で決定された僧令は、州や郡といった下位の行政区で開催される僧侶会議で各寺院に通達されるため、一定の影響力をもつことがあげられる。また、マハーニカーイ派のサンガ上層部はカンボジア人民党と密接な関係性をもつことから、僧令を分析することで与党の意図を読み解く一助になると考えた。加えて、これまで実施してきた長期フィールドワーク調査によって得られた知見から、一般の僧侶のローカルな仏教実践も踏まえて、サンガと政府の協力関係について解明する。

以上の目的を達成するため、2017年7月13日から8月7日までカンボジアに渡航し、プノンペン都を中心に資料収集と聞き取り調査を実施した。現地調査で収集した資料は、宗教省刊行の年次報告書、仏教に関する省令や公告、また、サンガが作成した資料のうち、全国幹部僧侶年次会議資料や僧令、公告、サンガの組織運営に関する資料である。ポル・ポト政権が崩壊して間もない1980年代の会議資料については、保管状態や政治的な問題から収集が非常に困難であったため、カンブチア救国民族統一戦線の刊行物やSPK通信も収集の対象とした。これらの収集した資料の分析に加えて、宗教省職員やサンガ上層部の僧侶を対象に、共産主義政権時代の宗教行政や全国幹部僧侶年次会議の開催状況、現在のサンガ上層部の構造、サンガが抱える問題についての聞き取り調査を実施した。

【結論・考察】(400字程度)

サンガの公式な資料によると、全国幹部僧侶年次会議の開催はフランス植民地時代の1943年にまで遡ることができた。その後、1943年から1972年、1992年から現在までの開催記録が残されていた。また、公式

な記録ではないものの、カンプチア救国民族統一戦線の定期刊行物からはポル・ポト政権崩壊後の 1980 年に会議が再開されていたことが確認できた。これらの会議の名称は時代によって異なるものの、その目的はサンガを管理・統制しながら利用することだと考えられる。

会議の内容について考察すると、1980 年代の会議では国家の法とサンガの律の遵守、プロパガンダ・インフラ建設・社会福祉の役割が僧侶に期待されていた。そして、内戦終結後の 1992 年以降の僧令からは、国家の法とサンガの律の遵守のほか、社会開発への参画や道德教育が僧侶の役割として重視されてきたことがわかる。また、マハーニカーイ派の僧令ではフン・セン首相の四辺形戦略の原則の支持についても言及されていた。そして、これらの僧令は宗教省の省令や公告とも深く関連しており、相互に影響を与えている。

以上のことから、サンガ上層部はポル・ポト政権崩壊後から一貫して与党の政策を支持しており、政策の一部を担ってきたことがわかる。カンボジアでは一般の僧侶が社会活動を志向しており、その背景には政策やサンガ上層部の方針の影響がみられる。